

初代高尾元吉原の時代、引據なきに

二代高尾數代のうちすぐれて名妓のきこえ高し、これを萬治高尾といふ、貞享板江戸鹿子

三代高尾袖かゞみに、高尾を評して、いまだ年わかとはいひながつて、時代つまびらかならずとい

へども、延寶四年板本へたるべし、天和三年の寫本、紫の一もとに、高尾小紫、今はなしと

文のすゑを、さかりにへたるべし、天和三年の寫本、紫の一もとに、高尾小紫、今はなしと

四代高尾元祿四年板本、幕そるひに、高尾あり、元祿七年板本、草すり引に、いつぞや、わづらひより、

は、中絶なるべし、

五代高尾元祿十二年春、出廓のよし、元正間記

〔兔園小説九〕遊女高尾

著作堂の珍藏に、美地乃久艸紙といふ有り、それは陸奥の太守の醫師工藤平助が女の、同藩只野氏に嫁して、仙臺に在が筆記なり、その中に高尾が事跡をしるしたり、世の妄説を正すに足れり、曰、昔の國主、高尾といふ遊女を黄金にかへて、くるわを出し給ひて、御たちまでもめし入られず、中す川註にて切はふらせたまふと、世の人思へるはあらぬことなり、是はうた上るりにおもしろく事添て作りなどして、やがて誠のごとくなりしものなり、高尾はやはり御たちにめしつかはれてのち老女と成て、老後跡をたて給はりしは、番士杉原重太夫又新太夫と、代々かはるかはる名のりて、祿玄米今目付役をつとむる重太夫はその末なり、只野家近親なるゆゑ、ことのははしれり、杉原家にて世の人あらぬことを、まことしやかに、となふるはをかしと思ふべけれど、我こそ高尾が末なりと名のらんにも、おもたゞしからねば、おしだまりて聞ながしをるとなり、これをいと珍らしき事とおもひて、うつしおきけるに、この比ある人のもとより、その法號葬地等を書付、おこせられたれば、著作堂の主にしめさんとて、こゝにのす、その記に曰、仙臺の人なにか